



二七 紫の極めて薄き色。  
 二八 此の次脱漏あるべしと  
 二九 諸家ははれたれど、作者の  
 三〇 心持を形容したるものと見  
 三一 本朝事跡考及び丹波風  
 三二 土記に天女の天降り説  
 三三 主上、皇族、極位の人  
 三四 人の衣に用ふるための禁  
 三五 色、即ち青色、赤色、濃紫  
 三六 及び綺綾織物の唐衣を  
 三七 着ることを許されたる人  
 三八 白地の絹に物の形を纏  
 三九 色などにて摺出したるも  
 四〇 赤に紫がよりたるも  
 四一 表衣に重ねて着る打  
 四二 衣。打衣と単との中に着る  
 四三 重桂のこと。此の三枚重ね  
 四四 たるを三重といふ。表裏共  
 四五 襷の色目の名。表裏共  
 四六 黄なるもの。  
 四七 表裏共青。  
 四八 一述の如く禁色にて、  
 四九 之を許されたるなり。

御簾の中を見わたせば、色ゆるされたる人々は  
 例の青色赤色の唐衣に、地摺の裳、うはぎはおし  
 わたして蘇枋の織物なり。<sup>(三三)</sup> たゞ右馬の中將ぞえび  
 ぞめを着て侍りし。<sup>(三四)</sup> うちものどもは濃き薄き紅葉  
 をこきませたるやうにて、中なる衣ども、例のく  
 ちなしのこきうすき、紫苑色、<sup>(三七)</sup> うら青き菊を、も  
 しは三重など、心々なり。<sup>(三八)</sup> 綾ゆるされぬは、例の  
 おとなくしきは無紋の青色、もしは蘇枋など、  
 みな五重にて、かさねどもは皆あやなり。大海の  
 すり裳の水の色はなやかに、あざあざとして、腰ど  
 もは<sup>(三九)</sup>かたもんをぞ多くはしたる。桂は菊の三重五  
 重にて、織物はせず。わかき人は菊の五重の唐衣

三九 経緯ともに生絲の染め  
 たるにて絲を浮かせず堅く  
 織りたるもの。

四〇 程遠き所は見えぬな  
 四一 品よきこと。

を心々したり。上は白く、青きがうへをば蘇枋、  
 ひとへは青きもあり。上薄蘇枋、つきつき濃き蘇  
 枋、中に白きませたるも、すべてしざまをかしき  
 のみぞかどくしく見ゆる。いひ知らずめづらし  
 く、おどろくしくしき扇どもも見ゆ。  
 うちとけたる折こそ、まほならぬかたちもうち  
 まじりて見えわかれけれ。心を盡してつくるひけ  
 さうじ、劣らじとしたてたる、女繪のをかしきに  
 いとよう似て、年の程のおとなび、髪<sup>(四〇)</sup>の少しおと  
 ろへたるけしき、又盛り<sup>(四〇)</sup>のこちたきが、我が前ば  
 かり見わたさる。さては扇よりかみの額つきぞ、  
 あやしく人のかたちを<sup>(四一)</sup>しなくしくも、下りても、



四 門又ハ巾舞項莊鴻  
 八曲ガデニハ  
 樂壹越調二唐  
 五曲の用ハ大  
 大變ならず。作  
 者詳ならず。唐  
 九者とも博雅  
 樂位又博雅  
 三位の雅調の  
 一。舞人退調の  
 際曲のみ奏す。  
 故に退出音聲と  
 いふ。拍。東帯の  
 下。衣の下。又  
 直衣の下。後世  
 小袖着る。後世  
 五五 圓融院。  
 二。忌々しきこ  
 とにて。涙をい  
 ふ。折に涙を出す  
 き。折に涙を出す  
 は。忌々しきな  
 り。されば下に  
 「打ちこぼしつ  
 べし。」とあり。

五五 三 顯光。  
 五 四 朗詠に「嘉  
 辰令千秋樂未  
 萬歳とあるを公  
 任など諸聲に誦  
 べし。萬歳樂の  
 の樂の字ヲ入な  
 るべし。榮花物  
 語には公任齊信  
 諸聲に誦したるこ  
 とを明記せり。  
 五六 右大臣が書  
 五七 道長の家  
 司。即ち家事を  
 扱ふ。職員の草  
 五八 右大臣の草  
 案。  
 五九 不比等の子  
 四人。南。北。式。  
 京の四家に分  
 一。北家道長の  
 意。門の外といふ  
 六〇 右衛門督兼

池の水波立ち騒ぎ、そゞろ寒きに、うへの御柏唯二つ奉  
 り給へりける。左京の命婦の己が寒かめるままにいとほ  
 しがり聞えさするを、人々は忍びて笑ふ。筑前の命婦は、  
 「古院のおはしましし時、此の殿の行幸はいと度々ありし  
 ことなり。」と、其のをりかのをりなど思ひ出でていふを、  
 (五二) ゆゆしきことも有りぬべかめれば、わづらはしとて、こ  
 とにあへしらはず、几帳へだててあるなめり。「あはれい  
 かなりけむ。」などだにいふ人あらば、うちこぼしつべか  
 めり。  
 御前のあそび始りていとあもしろきに、若宮の御聲う  
 つくしうきこえ給ふ。(五三) 右のおとど「萬歳樂御聲にあひて  
 なん聞ゆる。」と、もてはやしきこえたまふ。(五四) 左衛門の督

など「萬歳樂、千秋樂。」と、もろごゑに誦して、あるじのお  
 ほいどの「あはれさまさまの行幸を、などてめいぼくあり  
 と思ひたまへけむ。かかりける事も侍りけるものを。」と、  
 酔ひ泣きし給ふ。さらなることなれど、御みづからもお  
 ぼし知るこそいとめでたけれ。  
 殿はあなたに出でさせ給ふ。うへは入らせ給ひて、右  
 の大臣を御前に召して、(五六) 筆とりて書き給ふ。宮つかさ、  
 殿のけいしのさるべき限り加階す。頭の辨して(五九) あないは  
 奏せさせ給ふめり。新しき宮の御よろこびに、氏の上達  
 部引き連れて拜し奉り給ふ。藤原ながら門(五九) わかれたるは  
 列にも立ち給はざりけり。次に別當になりたる(六〇) 右衛門の督、  
 大宮の大夫よ。(六一) 宮のすけ、加階したる侍従の宰相、つぎ

中宮大夫たる齊  
 信が本官以外に  
 新皇子の別當と  
 なれる宮のすけは  
 一権大夫中納言俊  
 賢を指すか。藤  
 原實成が權亮侍  
 從宰相たりしこ  
 と。榮花物語に見  
 ゆ。唐風の禮に  
 六二、加階したる  
 て、の、唐風の禮に  
 前にも見たり。御  
 行ふことも草子

つぎの人<sup>(六三)</sup>舞踏す。宮の御方に入らせ給ひて程もなきに夜  
 いたう更けぬ。御輿寄すとののしれば出でさせ給ふ。

またのあしたに、内の御使朝霧もはれぬに参れり。うちやすみ過して見すな  
 りにけり。けふぞ始めてそひ奉らせ給ふ。殊更に行幸の後とて。又の日宮の家  
 司、別當、おもと人など職司定まりけり。かねても聞かでねたきこと多かり。  
 日頃の御しつらひ例ならずやつれたりしをあらたまりて、御前の有様いとあら  
 まほし。年ごろ心もとなく見奉りける御事のうちあひて、あけたてば殿もうへ  
 も参り給ひつつ、もてかしづき聞え給ふにほひいと心ことなり。

幕れて月いとおもしろきに、宮のすけ女房にあひて、とりわきたる慶びも啓  
 せさせむとにやあらむ。妻戸のわたりも御湯殿のけはひに濡れ、人の音もせざ  
 りければ、此の渡殿の東の妻なる宮の内侍の局に立ち寄りて、「ここにや。」とあ  
 ないし給ふ。宰相は中の間によりて、まだささぬ格子のかみ押し上げて、「おは  
 すや。」などあれど、出でぬに、大夫の「こゝにや。」とのたまふにさへ聞きし

一 小兒誕生後五  
 十日目の祝儀を  
 いふ。當時繪合せ、

ばむもことごとしきやうなれば、はかなきいらへなどす。いと思ふ事なげなる  
 御氣色どもなり。「わが御いらへはせず、大夫心をことにもてなしきこゆる、こ  
 とわりながらわろし。かゝる所に、上臈のけちめいたうは別くものか。」とあは  
 め給ふ。「けふのたふとさ。」など聲をかしう歌ふ。  
 夜ふくるまゝに月いとあかし。「格子のもと取りさけよ。」と、せめ給へど、い  
 と下りて上達部の居給はむも、所といひながらかたはらいたし。若やかなる人  
 こそ物の程知らぬやうにあさへたるも罪ゆるさるれ。何かあざれがましと思へ  
 ば、はなたす。

二三 いかの御祝

御<sup>(六四)</sup>いかは霜月のついたちの日。例の人々のしたてての  
 ぼり集ひたる御前の有様、繪にかきたる<sup>(六五)</sup>物合の所にぞい



一五。炬火。續松  
 一六。紙燭。太さ  
 一七。紙燭。太さ  
 一八。紙燭。太さ  
 一九。紙燭。太さ  
 二〇。紙燭。太さ  
 二一。紙燭。太さ  
 二二。紙燭。太さ  
 二三。紙燭。太さ  
 二四。紙燭。太さ  
 二五。紙燭。太さ  
 二六。紙燭。太さ  
 二七。紙燭。太さ  
 二八。紙燭。太さ  
 二九。紙燭。太さ  
 三〇。紙燭。太さ  
 三一。紙燭。太さ  
 三二。紙燭。太さ  
 三三。紙燭。太さ  
 三四。紙燭。太さ  
 三五。紙燭。太さ

々は見る。内の臺盤所にもてまゐるべきに、明日よりは  
 御物忌とて、今宵皆急ぎとりはらひつつ、宮の大夫御  
 簾のもとに参りて、上達部お前に召さむと啓し給ふ。き  
 こしめしつとあれば、殿より始めて皆参り給ふ。はしの  
 東の妻戸の前まで居給へり。女房二重三重づつゐわたさ  
 れたり。御簾どもを、其の間にあたりてゐ給へる人々寄  
 りつつ巻き上げ給ふ。大納言の君、小少將の君、宮の内  
 侍と居給へり。  
 右の大臣よりて、御几帳のほころび引き断ち亂れ給ふ。  
 さたすぎたりとつきじろふも知らず、扇をとり、たはぶ  
 れごとのはしたなきも多かり。大夫かはらけ取りてそな  
 たに出で給へり。みのやま歌ひて、御遊びさまばかりな

一。炬火。續松  
 二。紙燭。太さ  
 三。紙燭。太さ  
 四。紙燭。太さ  
 五。紙燭。太さ  
 六。紙燭。太さ  
 七。紙燭。太さ  
 八。紙燭。太さ  
 九。紙燭。太さ  
 一〇。紙燭。太さ  
 一一。紙燭。太さ  
 一二。紙燭。太さ  
 一三。紙燭。太さ  
 一四。紙燭。太さ  
 一五。紙燭。太さ  
 一六。紙燭。太さ  
 一七。紙燭。太さ  
 一八。紙燭。太さ  
 一九。紙燭。太さ  
 二〇。紙燭。太さ  
 二一。紙燭。太さ  
 二二。紙燭。太さ  
 二三。紙燭。太さ  
 二四。紙燭。太さ  
 二五。紙燭。太さ  
 二六。紙燭。太さ  
 二七。紙燭。太さ  
 二八。紙燭。太さ  
 二九。紙燭。太さ  
 三〇。紙燭。太さ  
 三一。紙燭。太さ  
 三二。紙燭。太さ  
 三三。紙燭。太さ  
 三四。紙燭。太さ  
 三五。紙燭。太さ

れどいとおもしろし。其の次の間の、ひんがしの柱のも  
 とに右大將よりて、衣のつま袖ぐちかぞへ給へるけしき  
 人よりことなり。酔ひのまぎれをあなづりきこえ、又誰  
 かとはなど思ひ侍りて、はかなきことをもいふに、いみ  
 じくざれ今めく人よりもけにこそおはすべかめりしか。  
 盃の順の來るを大將はおぢ給へど、例のことならひの千  
 とせ萬世にて過ぎぬ。  
 左衛門の督「あなかしこ此のわたりに若紫やさぶらふ。」  
 とうかひ給ふ。「源氏にかかるべき人見え給はぬに、彼  
 の上はまいていかでものし給はむ。」と聞きゐたり。「三位  
 のすけかはらけとれ。」などあるに、侍従の宰相たちて、  
 内の大臣のおはすれば下より出でたるを見て、大臣酔ひ

三二 源氏物語の  
紫の上。給はむ。  
三三 侍從宰相。實  
成、當年十月十  
六日、從三位と  
三 五 内大臣公季  
は實成の父なる  
ゆゑ、一旦縁に  
出でてより祝の  
杯を頂きたるを  
見るとなり。  
三六 宮の大夫齊  
信のこと。  
三七 道長公制し  
給はずとの意。

泣きし給ふ。<sup>(三二)</sup> 權中納言すみの間の桂のもとによりて、兵部のおもとひこじろひ、聞きにくき戯れごとも、<sup>(三七)</sup> 殿のたまはず。

おそろしかるべき夜の御酔ひなめりと見て、事果つるままに、宰相の君にいひ合せて隠れなむとするに、東のおもてに殿の公達、宰相中將など入りて騒がしければ、二人の御帳の後ろに隠れたるを、とりはらはせ給ひて、二人ながらとらへすゑさせ給へり。「和歌一つづつ仕うまつれ。さらば許さむ。」とのたまはず。いとほしく恐ろしければきこゆ。

いかにいかがかぞへやるべき八千歳のあまり久しき君がみよをば

「あはれ仕うまつれるかな」と、二たびばかり誦させ給ひて、いと疾うのたまはせたる。

あしたづの齡しあらば君がよの千年のかずもかぞへとりてむ

さばかり酔ひ給へる御こちにも、おぼしけることこのさまなれば、いとあはれにことわりなり。げにかくもてなし聞え給ふにこそはよろづの飾りもまさらせ給ふめれ。ちよもあえましく、御行く末の、數ならぬ心地にだに、思ひつづけらる。

「宮の御前きこしめすや。仕うまつれり。」と、戯れぼめし給ひて、「宮の御てにてまろわろからず、まろがむすめにて宮わろくおはしまさず。<sup>(三八)</sup> 母も亦幸ひありと思ひて

三八 道長が自ら中宮に對して己



れの妻のことを  
斯くいふなり。

三九 道長の妻。  
中宮の母。

四〇 親ありて、  
その保護あれば、  
こそその意。

一 中宮の宮中に  
還御せらる事。

笑ふめり。よい男はもたりかしと思ひたんめり。」ど、戯  
れ聞え給ふもこよなき御酔ひのまぎれなりと見ゆ。さる  
こともなければ、さわがしきこちはしながらめでたく  
のみ聞きぬさせ給ふ殿の上ききにくしとおぼすにや、渡  
らせ給ふめるけしきなれば、「送りせずとて、母恨み給は  
むものぞ。」とて、いそぎて御帳の内をとほらせ給ふ。「官  
なめしとおぼすらむ。親のあればこそ子もかしこけれ。」  
とうちつぶやきたまふを人々笑ひきこゆ。

### 一四 宮の御さうし

入らせ給ふべき事も近うなりぬれば、人々はうちつぎ  
つつ心のどかならぬに、御前には御さうし造り營ませ給

二 以下は、寫す  
べき色々の紙を  
選び、原本の物  
語の書を添へて  
書寫すべし人々  
の許に依頼文を  
かき配ることな  
りといふ。  
三 道長の言葉。

四 諸註、式部に  
下賜せられたる  
やうに解けど、  
(五)と重複すれ  
ば、式部に其  
の筆墨を取りて  
書かせ給へるな  
るべし。なほ「惜  
しみのいしりて  
しみの不明、惜  
しみのみして」  
の誤寫にあらず  
り。  
五 道長の行爲な

ふとて、明けたてばまづ向ひさぶらひて、色々の紙えり  
ととのへて物語の本ども添へつつ、ところ／＼にふみ書  
きくばり、且は綴ぢ集めしたたむるを役にて明し暮す。  
「何の心地かつめたきに、かかるわざはせさせ給ふ。」と、  
きこえたまふものから、良き薄様ども、筆墨などもてま  
わり給ひつつ、御硯をさへもて参り給へれば、とらせ給  
へるを惜しみののしりて、もののくまに向ひさぶらひて、  
かかるわざしいづ、とさいなむなれど、書くべき墨筆な  
ど給はせたり。局に、物語の本どもとりによりて、隠しお  
きたるを、御前にある程にやをらおはしまして、あさら  
せ給ひて、皆内侍のかんの殿に奉り給ひてけり。よろし  
う書き換へたりしはみなひき失ひて、心もとなき名をぞ

六 道長の二女妍子。書換のよき分は失ひて、原本の悪きもののみ残りたるを道長に取られて、研子に與へられたれば、といふ意。

一 二日目に丁度意地悪く雪の降るものかな。と嘆するなり。

とり侍りけむかし。

わか宮は御物語などせさせ給ふ。うちに心もとなくおぼしめす。ことわりなりかし。

一五 水のうきね

御前の池に水鳥どもの日々に多くなりゆくを見つつ、「入らせ給はぬさきに雪降らなむ。このお前の有様、いかにをかしからむ。」と思ふに、あからさまにまかでたるほど、二日ばかりありてしも雪は降るものか。見所もなきふるさとの木だちを見るにも、物むつかしう思ひ亂れて、年頃つれづれにながめ明し暮しつつ、花鳥の色をも音をも、春秋にゆきかふ空のけしき、月の影、霜雪を見て、「その時來にけり。」とばかり思ひわきつつ、「いかにや、い

三 未だ以上は式部が宮仕へせざりて當時に回顧して一 恥かしつらして思ふことを免れたりしに、然るに今はさも云々。今昔見しや。すべし。續けて解

かに」とばかり、行末の心細さはやる方なきものから、はかなき物語などにつけて、うち語らふ人、同じ心なるはあはれに書きかはし、少しけ遠きたよりどもを尋ねてもいひけるを、ただ是をさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをば慰めつつ、世にあるべき人数とは思はずながら、さしあたりはづかし、いみじと思ひしる方ばかりのがれたりしを、<sup>(三)</sup>さも残せる事なくおもひ知る身のうさかな。  
試みに物語を取りて見れども、<sup>(四)</sup>見しやうにもおぼえず。あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、<sup>(五)</sup>我れをいかにおもなく心淺き者と思ひおとすらむと推し量るに、それさへいと恥しくてえおとづれやらす。心にくか

五 「宮仕へに出  
でたる我を」な  
六 式部のゆかし  
からむと思へる  
人は、彼方より  
文を送るも、宮  
仕への式部はそ  
れを傍聴の間、  
散らさむと疑ふ  
べしと式部の斷  
ずるなり  
七 我が眞面目の  
心の様をいふの  
八 諸本(あまた)  
とある誤入なる  
べし。  
九 あり、また。  
「り」の字脱落せ  
るものと見ゆ。  
類聚本による。  
一〇 音なひ来る  
人にも固う(か  
たくるしくする  
こと)などしつ  
ゝの意。一本か  
たうを勘當にあ  
てたるもあり。

らむと思ひたる人は、おほそらにては文や散らすらむ、  
など疑はるべかめれば、いかでかは、我が心のうちある  
様をも深うおしはからむと。ことわりにて、いとあいな  
ければ、中たゆとなけれど、おのづから、(あまた)かき絶  
ゆるもあまた住み定らずなりにたり。とも思ひやりつつ、  
音なひ来る人もかたうなどしつつ、すべてはかなき事に  
ふれても、あらぬ世にきたる心地ぞここにてしもうちま  
さり、物あはれなりけり。  
ただえさらずうち語らひ、少しも心とめておもふ、こ  
まかにものをいひかよふ、よしありて、おのづから睦び  
語らふ人ばかり、少しなつかしく思ふぞ物はかなきや。  
大納言の君の、よるくはお前にいと近うふし給ひつつ、

一 一 新勅撰集の歌と共  
りに中宮のおん  
もとにて起き臥  
ししたることを  
戀しどく、里に  
居れど寒さは昔  
に變らす、うき  
ねの鴨の牙え渡  
る霜にも劣らぬ  
との意。

一二 式部のなり

物語し給ひしけはひの戀しさも、なほ世にしたがふ心か。  
うきねせし水の上のみこひしくて鴨の上毛に冴  
えぞおとらぬ  
返し  
うちはらふ友なき頃の寝さめにはつがひし鴛鴦ぞ  
よには戀しき  
書きざまなどさへいとをかしきを、まほにもおはする人  
かなと見る。  
「雪を御覽じて、をりしもまか(二二)でたる事をなんいみじ  
くにくませ給ふ。」と、人々ものたまへり。殿の上の御せ  
うそこには「まるがとどめしたびなれば、ことさらに急  
ぎまかんで、とく參らむとありしも、そらごとにて程



十 以下早朝の事。以下此方の陣の  
 八 言動なり。公郷  
 九 兵衛、衛門等  
 一 内裏、衛門等  
 一 送らる。以下思ひ  
 一 確なる解なし。  
 一 各自路に急ぎ  
 一 里人ぞあると急ぎ  
 一 意に人多くと急ぎ  
 一 中又は途多くと急ぎ  
 一 滯りては途多くと急ぎ  
 一 戲るなるべしと急ぎ  
 一 一の道長よりか。と急ぎ  
 一 二宮への贈物。中

二〇八  
 寄り來つとぶらふもいとなかくなり。今宵は無きも  
 のと思はれてやみなばやと思ふを、人に問ひ聞き給へる  
 なるべし。い<sup>(七)</sup>とあしたに参り侍らむ。こよひは堪へがた  
 く身もすくみて侍り。など。ことなくいひつつ此方の陣<sup>(九)</sup>  
 のかたより出づ。お<sup>(八)</sup>のがじし家路といそぐも。なにばか  
 りのさと人ぞはと思ひ送らる。わが身によせては侍らず。  
 大かたの世のありさま、小少將の君のいとあてに、をか  
 しげにて、世を憂しと思ひしみて給へるを見侍るなり。  
 ち、君よりことはじまりて、人のほどよりは幸のこよな  
 くおくれ給へるなめりかし。  
 よべの御贈り物今朝どこまかに御覽する。御櫛の宮の  
 うちの具ども言ひつくし見やらむかたもなし。手篋<sup>(二〇)</sup>ひと

三 喜五年醍醐天皇延  
 一 勅を奉じて撰集し  
 一 四 勅を奉じて撰集し  
 一 等 勅を奉じて撰集し  
 一 五 勅を奉じて撰集し  
 一 六 勅を奉じて撰集し  
 一 七 勅を奉じて撰集し  
 一 八 勅を奉じて撰集し  
 一 九 勅を奉じて撰集し  
 一 十 勅を奉じて撰集し

よろひ、かたつかたには白き色紙、つくりたる御さうし  
 ども、古今<sup>(二一)</sup>、後撰集、拾遺抄。其の部どもは五帖につく  
 りつゝ、侍從の中納言と、延幹<sup>(二二)</sup>とおのくさうし一つに  
 四巻をあてつつ書かせ給へり。表紙は羅、紐同じからの  
 組み、かけごの上に入れたり。下には、能宣、元輔やう  
 の、いにしへ今の歌よみどもの家々の集書きたり。延幹  
 と近澄<sup>(二三)</sup>の君と書きたるはさるものにて、これはただけぢ  
 かうもてつかはせ給ふべき、見しらぬものどもにしなさ  
 せ給へる、今めかしうさまことなり。

ごせちは二日にまゐる。侍從の宰相にまひ姫のさうぞくなどつかはす。右の  
 宰相の中將の、五節にかづら申されたるつかはすついでに、宮一よろひにたき  
 ものいれて、心葉、梅の枝をして、いどみ聞えたり。にはかにいとなむ。常の

見知らぬ人々に  
書かされて、給へる  
ものにて、今め  
かしく、様こと  
なり。との意な  
らむか。

年よりも、いどみましたるきこえあれば、ひんがしのおまへの、向ひなる立蒔にひまもなく打ちわたしつつ、ともしたる火の光晝よりもはしたなげなるに、歩み入るさまなども、あさましうつれなのわざやとのみ思へど、人の上とのみおぼえす。たゞかう、殿上人のひたおもてにさしむかひ、しそくささぬばかりぞかし。屏慢ひきおほひやるとすれど、大かたの氣色は同じごとぞ見るらむと思ひ出づるも、まづむねにふたがる。

業遠の朝臣のかしづき、錦の唐衣、やみ夜にもものに紛れず、めづらしう見ゆ。きぬがちにみじろきもせで、たをやかならずぞ見ゆる。殿上人心ことにもてかしづく。こなたにうへもわたらせ給ひて御覽す。殿も忍びて、遣戸より外におはしませば、心にまかせたらずうるさし。仲清のはたけども等しくとのひ、いとみやびかに心にくきけはひ、人に劣らずとさだめらる。右の宰相中將のあるべきかぎりは、みなしたり。ひすましのふとりとのひたるさまをぞ、さとびたりと人ほほゑむなりし。はてに藤宰相の、おもひなしにいまめかしく、

心ことなるかしづき十人あり。又廂の御簾おろして、こぼれ出でたるきぬのつまども、したりがほにおもへるさまどもよりは見どころまさりて、火かげに見えわたさる。

□

寅の日のあした殿上人まゐる。常の事なれど、月ごろにさとびけるにや、わか人たちのめづらしと思へるけしきなり。さるは、すれる衣も見えずかし。其の夜さり春宮のすけめして、たき物たまふ。大きやかなる筥一つにたかう入れさせ給へり。尾張へは殿のうへぞつかはしける。其の夜はおまへのころもみとか、うへにわたらせ給ひて御覽す。若宮おはしませば、うちまきしののしる、常にことなる心地す。

物うければ、しばしやすらひ、ありさまに従ひて参らむと思ひてゐたるに、小兵衛、小兵部なども炭櫃にゐて、「いと狭ければ、はかばかしう物も見え侍らず。」などいふ程に、殿おはしまして、「などてかうてすぐしてはゐたる。いざ

もろともに。」と、せめたてさせ給ひて、心にもあらずまうのぼりたり。舞姫どものかにくるしからむと見ゆるに、尾張守のぞ心あしがりていぬる、夢のやうに見ゆるものかな。事はてておりさせ給ひぬ。この頃のきんだちはたゞ五節所のをかしき事をかたる。「簾のはし、帽額さへ心心にかはりて、いでわたるかしらつき、もてなしけはひなどさへさらにかよはず、さまざまになんある。」と、聞きにくく語る。

かからぬ年だに、御覽の日のわらはの心地どもはおろかならざるものを、ましていかならむなど、心もとなくゆかしきに、歩みならびつつ出で來たるは、あいなくむねつぶれて、いとほしくこそあれ。さるは、とりわきて深う心よすべきあたりもなしかし。我れもわれもと、さばかり人のおもひて、さしいでたることなればにや、目うつりつつ、おとりまさり、けさやかに見えわかず。今めかしき人の目にこそ、ふと物のけぢめも見とるべかめれ。ただかく曇りなき畫中に、扇もはかばかしくもたせず、そこらの公達の立ちまじりたるに、さ

でもありぬべき身のほど、心もちゐといひながら、人におとらじとあらそふ心地もいかに臆すらむと、あいなくかたはらいたきぞかたくなしきや。

丹波の守のわらはの青いしらつるばみの汗疹をかしと思ひたるに、藤宰相の童は赤色をきせて、下仕のからぎぬに青色をおしかへしたるねたげなり。童のかたちも、一人はいとまほには見えす。宰相の中將のは、童いとそびやかに、髪どもをかし。皆濃き袖に、うはぎは心々なり。汗疹は五重なる中に、尾張は唯えびぞめをきせたり。なか／＼ゆゑ／＼しく心あるさまして、物の色合つやなど、下仕のいとかほすぐれたる、扇とるとて、六位の藏人どもよるに、心と投げやるこそやさしきものから、女にはあらぬかと思ゆれ。我等を彼がやうに出てゐよとあらば、またさてもさまよひありくばかりにぞかし。かうまで立ち出でむとは思ひかけきやは。されど、目に見ず、あさましきものは人の心なりければ、今より後のおもなさはたゞ馴れになれ過ぎ、ひたおもてにならむもことやすしかしと、身の有様の夢のやうにおもひつづけられて、あるまじき事

にさへ思ひかゝりて、ゆゑしくおぼゆれば、目とまることも例のなかりけり。侍従の宰相の五節のつぼね、宮のお前のただ見わたすばかりなり。立蒞の上より音に聞く簾のはしも見ゆ。人の物いふ聲もほのきこゆ。「かの女御の御方に、左京、うまといふ人なん、いとなれてまじりたる。」と、宰相の中將むかし見しりて語り給ふを、一夜かのかいつくろひにてゐたりし、ひんがしなりしなん左京と、源少將も見知りたりしを、物のよすがありて、傳へ聞きたる人々「をかしろもありけるかな。」といひつゝ、いさ、知らずがほにはあらじ、むかし心にくだちて見ならしけむ内わたりを、かかるさまにてやは出で立つべき。しのぶと思ふらむをあらはさむの心にて、おまへに扇ども數多さぶらふ中に、蓬萊つくりたるをしもえりたる、心ばへあるべし。見知りけむやは。宮の蓋にひろげて、日蔭をまろめて、そらいたる櫛ども、白き物いみじくつまづまをゆひそへたり。少しさだすぎ給ひにたるわたりにて、櫛のそりざまなんほくしきと、公達のたまへば、今様のさまあしきまで、つまもあはせたるそらしさまし

て、黒方くろほうをおしまろがして、ふつつかにしりさき切りて、白き紙一かさねにたてぶみにしたり。大輔のおもとして書きつけさす。

おほかりしとよの宮人さしわきてしるき日かげをあはれとぞ見し

おまへには、「同じくはをかしきさまにしなして、扇なども數多こそ。」とのたまはすれど、「おどろおどろしからむも、事のさまにあはざるべし。わざと遣すにては、忍びやかにけしきばませ給ふべきにも侍らす。これはかかるわたくしごとこそ。」ときこえさせて、顔しるかるまじき局の人して、「これ中納言の御使、女御どのより左京の君に奉らむ。」と、高やかにさしおきつ。引きとゞめられたらむこそ見苦しけれと思ふに、走りきたり。女の聲にて、「いづこより入り來つる。」と問ふなりつるは、女御どののとうたがひなく思ふなるべし。なにばかりの耳とどむる事もなかりつる日頃なれど、五節過ぎぬとおもふ内わたりのけはひ、うちつけにさうくしき。小忌の日の夜の調樂はげにをかしかりけり。若やかなる殿上人など、いかになごりつれづれならむ。



高松の小公達さへ、こたみ入らせ給ひし夜よりは女房ゆるされて、まもなくとほりありき給へば、いとほしたなげなりや。さだすぎぬるを功にてぞかくろふる。五節こひしなども殊に思ひたらず、やすらひ、小兵衛などや、その裳の裾、汗疹にまつはれてぞ、小鳥のやうにさへすりされおはすめる。

□

臨時の祭の使は殿の權中將の君なり。その日は御物忌なれば、殿御とのみせさせ給へり。上達部も、舞人の公達もこもりて、夜一夜、細殿わたりいともさわがしきけはひしたり。つとめて内におほいどのの御隨身、この殿のみずるじんにさしとらせていける。ありし宮の蓋に白がねのさうし宮をすゑたり。鏡をおし入れて、沈のくし、白がねのかうがいなど、使の君のびんかかせ給ふべきけしきをしたり。宮のふたに葦手にうちいでたるは、日かげの返事なめり。文字二つおちてあやふし。ことの心たがひてもあるかなと見えしは、かのおとどの、宮よりと心え給ひて、かうことごとしくしなし給へるなりけりとぞき、

侍りし。はかなかりしたはぶれわざを、いとほしうことごとしうこそ。

殿のうへもまうのぼりて物御覽す。使の君の藤かざして、いともくしくおとなび給へるを、くらの命婦は舞人にはめも見やらす、うちまもりくぞ泣きける。御物忌なれば、御社より丑の時にぞ還りまゐれば、御神樂などもさまばかりなり。かねときがこぞまではいとつきくしげなりしを、こよなく衰へたるふるまひぞ、見識るまじき人のうへなれど、あはれに思ひよそへらるることおほく侍る。

### 一七 師走

師走の二十九日に参る。初めて参りしもこよひの事ぞかし。いみじくも夢路にまどはれしかなと思ひ出づれば、こよなくたちなれにけるも、うとましの身のほどやと覺ゆ。夜いたう更けにけり。御物忌におはしましければ、

一 臨時の祭後數日作者は里にありて今日又宮中に参りたるなり。

お前にもまゐらず。心細くて打ち臥したるに、前なる人々の、「うちわたりは猶いとけはひことなりけり。里にては今は寝なましものを、さもいざとき靴のしげさかな。」と、色めかしくいひゐたるを聞きて、

年くれてわが世更けゆく風の音に心のうちのすさまじきかな

とぞひとりごたれし。

つごもりの夜、追<sup>(三)</sup>難はいととく果てぬれば、は<sup>(三)</sup>ぐるめつけなど、はかなきつくろひどもすとてうちとけゐたるに、辨の内侍来て、物語して臥し給へり。内<sup>(四)</sup>匠の藏人は長<sup>(五)</sup>押の下にゐて、あてきが縫ふもののかさね、ひねりをしへなど、つくぐとしゐるたるに、お前の方にいみじく

二 夜、十二月晦日の  
災をなす、属鬼  
これをよつて、人  
を悩ますとて、  
之を追拂ふ儀式  
なり。  
三 鐵漿  
四 縫司の女功を  
する女蔵人か。  
五 廂の間に身屋  
段は高し。其の界

六 長押といふ。  
女童の名。

七 食膳を調進す  
八 北土、清涼殿の東  
に御膳所を設け  
九 けの御膳所を取締を仕  
一〇 する女官の殿上の間に

ののしる。内侍起せどとみにもおきず。人の泣き騒ぐ音の聞ゆるに、いとゆゆしくものも覺えず。火かとおもへど、さにはあらず。内匠の君いざくと先におしたてて、ともかうも、「宮しもおはします。先づ参りて見奉らむ。」と、内侍を荒らかにつき驚かして、三人ふるうく、足も空にて参りたれば、はだかなる人ぞ二人ゐたる。鞆負小兵部なりけり。斯くなりけりと見るに、いよく、むくつ<sup>(七)</sup>けし。御厨子所の人も皆出で、宮のさふらひも、瀧口も、<sup>(八)</sup>儼やらひ果てけるまゝに皆まかでけり。手をたたきののしれど、いらへする人もなし。おもものやどりの刀自を呼<sup>(九)</sup>びいでたるに、「殿上に兵部の丞藏人呼べく。」と、恥も忘れて口づから言ひたれば、尋ねけれど、まかでにけり。

行きて、兵部丞  
蔵人よべとな  
り。關根博士は  
此の二字衍な  
べしといはれた  
り。二 衣服調度  
ど納め置く所な

一三 元日なれば  
凶事を忌みて  
口外せざるべき  
に、それもしあ  
へずとなり。

つらきこと限りなし。式部の丞資業ぞ参りて、ところぐ  
のさし油どもたゞひとりさし入れられてありく。人々も  
の覺えずむかひゐたるもあり。上より御使などあり。い  
みじう恐ろしうこそ侍りしか。納殿(三)にある御衣取り出で  
させて、この人々に賜ふ。朔日のさうぞくはとらざりけ  
れば、さりげもなくあれど、裸すがたは忘れず。恐ろ  
しきものから、をかしうともいはず。こといみしもあへ  
ず。

正月一日、坎日なりければ、わか宮の御戴餅ひの事停まりぬ。三日ぞまうの  
ぼらせ給ふ。今年の御まかなひは大納言の君。さうぞく、朔日の日は紅えびぞ  
め、唐衣は赤色、地摺の裳。二日、紅梅の織物、かいねりに濃き、青色のから  
衣、色摺のも。三日は、からあやの櫻がさね。唐衣は蘇芳の織もの、かいねり

は、濃きを着る日はくれなゐは中に、紅を着る日は、濃きを中になど例のこ  
となり。萌黄、蘇枋、山吹の濃き薄き、紅梅、うす色など、常の色色をひとた  
びに六つばかりと、うはぎとぞ、いとさまよきほどにさふらふ。

宰相の君の、御はかしとりて、殿の抱き奉らせ給へるに、つづきてまう上り  
給ふ。紅の三重五重、みへいつへとませつつ、同じ色のうちたる七重に、ひと  
へをぬひかさねくませつつ、上に同じ色の固紋の五重、うちき、えびぞめの  
浮紋の櫃の紋をおりたり。ぬひさまさへかどくし。三重がさねの裳、あか色  
の唐衣、一重の紋おりて、しさまもいとからめいたり。いとおかしげに髪など  
も常よりつくるひ、ましてやうだいてもなしらうくしくをかし。たけだちよ  
きほどに、ふくらかなる人の、顔いとこまかに、にほひをかしげなり。

大納言の君は、いとさゝやかにちひさしといふべきかたなる人の、白ううつ  
くしげに、つぶくと肥えたるが、うはべはいとそびやかに、髪たけに三寸ば  
かり餘りたるすそつき、かんざしなどぞ、すべて似るものなく、こまかにうつ

くしきかほもいとらうくしく、もてなしなどらうたげになよびかなり。宣旨の君は、ささやけ人のいと細やかにそびえて、髪のうちこまやかにきよらにて、おひさがりのすそより一尺ばかり餘りたまへり。いと心はづかしげに、きはもなくあてなるさまし給へり。物よりさし歩みて出でおはしたるも、わづらはしう心つかひせらるる心地す。「あてなる人はかうこそあらめ」と、心さま、ものうちの給へるもおぼゆ。

一八 あげつらひ

この次に、人のかたちを語りきこえさせば、ものいひさがなくや侍るべき。たゞいまをや。さしあたりたる人のことはわづらはし。いかにぞやなど、少しもかたほなるはい侍らじ。宰相の君は北野の三位のよ。ふくらかにいとやうだいいこめかしう、かとかどしきかたちしたる

○これより以下、御堂へ渡らせ給ふ。御堂の前まで、文は著者の私記、消息文が日記の中に入れたるものと稱せらる。一「まして唯今眼は前の人の事をいひば一層物いひ

さかなしといはれむ」となり。

人、うちゐたるよりも、見もて行くにこよなくうちまさり、らうくしくして、口つきに、はづかしげさも、にほひやかなること添ひたり。もてなしなどいと美々しくはなやかにぞ見え給へる。心さまもいとめやすく、心うつくしきものから、またいとほづかしき所そひたり。小少將の君は、そこはかとなくあてになまめかしう、二月ばかりのしだり柳の様したり。やうだいいとらうつくしげに、もてなし心にくく、心ばへなどもわが心とは思ひとる方もなきやうに物づつみをし、いと世を恥ぢらひ、あまり見苦しきまでこめい給へり。はらきたなき人あしざまにもてなし、いひつくる人あらば、やがてそれにおもひ入りて身をも失ひつべく、あえかにわりなき所つ

給へるぞあまりうしろめたげなる。

宮の内侍ぞ又いときよげなる人、たけだちいとよきほどなるが、ゐたる様、姿つきいともものしく今めいたるやうだいにて、こまかに取り立ててをかしげとも見えぬものから、いと物清げにうひうひしく、なかたかきかほして、色のあはひ白きなど人にすぐれたり。かしらつき、かんざし、ひたひつきなどぞあな物清げと見えて、はなやかに愛敬づきたる。ただありにもてなして、心ざまなどもめやすく、露ばかりいづかたさまにもうしろめたい方なく、すべてさこそあらめと、人のためしにしつべき人がらなり。艶がりよしめく方はなし。

式部のおもとはおとうとなり。いとふくらけさ過ぎて

肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいとこまかによしばめる。髪もいみじくうるはしくて長くはあらざるべし。つくろひたるわざして宮にはまゐる。ふとりたるやうだいのいとをかしげにも侍りしかな。まみ、ひたひつきなどまことに清げなり。うちゑみたる愛敬も多かり。

若人の中にかたちよしと思へるは、小大輔、源式部。

小大輔はさゝやかなる人の、やうだいいと今めかしき様して、髪うるはしく、もとはいとちたくて、たけに一尺よ餘りたりけるを、落ちほそりて侍り。顔もかどかどしう、あなをかしの人やとぞ見えて侍る。かたちはなほすべき所なし。源式部はたけよき程にそびやかなるほどにて、顔こまやかに、見るままにいとをかしくらふたげ

なるけはひ、物清くかはらかに、人のむすめとおぼゆる  
さましたり。

小兵衛の亟などもいと清けに侍り。それらは殿上人の  
見残す少なかなり。誰もとりはづしてはかくれなけれ  
ど、人ぐまをも用意するにかくれてぞ侍るかし。

宮木の侍従こそいとこまかにをかしげなりし人。いと  
小さくほそく、なほわらはにてあらせまほしきさまを、  
心と老いつき、やつしてやみ侍りにし。髪三の鞋に少しあ  
まりて、末をいとはなやかにそぎてまゐり侍りしぞ、は  
てのたびなりける。かほもいとよかりき。

五節三の辨といふ人侍り。平中納言の、むすめにしてか  
しづく三と聞えしが、繪にかいたる顔して、ひたひいたう

二 嘗て五節の舞  
姫なりしなら  
む。  
三 平惟仲。

はれたる人の、まじりいたう低きく、顔もここはと見ゆ  
る所なくいとしろう、手つき、かいなつきいとをかしげ  
に、髪は見はじめ侍りし春は、たけに一尺ばかり餘りて、  
こちたく多かりげなりしが、あさましう分けたるやうに  
落ちて、すそもさすがに細らず、長さは少しあまりて侍  
るめり。

こまといふ人髪いと長く侍りし。昔はよきわかうど、  
今は四箏柱に膠さすやうにてこそ里居して侍るなれ。

かういひく、て、心ばせぞかたう侍るかし。それもと  
りぐにいとわろきもなし。又すぐれてをかしう心おも  
く、かどゆゑも、よしも、うしろやすさも皆具すること  
は難し。さまざま、いづれをかとるべきと覺ゆるぞ多く

四 諸註、時變を  
知らず里に下り  
て出で來ぬをい  
ふとあれど當ら  
ず。年老い、變に  
處するの才を失  
ひたれば里居し  
たるなるべし。  
史記に「蘭相如  
曰、王以名而使  
括、若耳。括徒能  
鼓琴耳。」

讀ニ父書傳ニ不  
知レ合レ變也」と  
あり。

侍る。さもけしからずも侍ることどもかな。

齋院に中將の君といふ人侍るなり。聞き侍るたよりありて人の許に書き交したる文を、みそかに人とりて見せ侍りし。いとこそえんに、われのみ世には物のゆゑ知り、心深きたぐひはあらし。すべて世の人は心も肝も無きやうに思ひて侍るべかめり。見侍りしに、すすろに心やましろ、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思ひ給へられしか。「文かきにもあれ、歌などのをかしからむは、わが院より外に誰れか見しり給ふ人のあらむ。よにをかしき人のおひいではわが院こそ御覽じ知るべけれ。」などぞ侍る。

げにことわりなれど、わが方さまのことをさしもいはば、齋院より出できたる歌のすぐれてよしと見ゆるも殊に侍らす。唯いとをかしう、よし／＼しうはおはすべかんめる所のやうなり。さぶらふ人を比べていどまむには、この見給ふるわたりの人に、必ずしもかれはまさらじを、常に入り立ちて見る人もなし。をかしき夕月夜、ゆゑある有明、花のたより、郭公のたづね所にまゐりたれば、

院はいと御心のゆゑおはして、所のさまはいと世はなれかんさびたり。又まぎるることもなし。上にまうのぼらせ給ふ。もしは殿なん参り給ふ。御とのゐなるなど、もの騒がしき折もまじらす。もてつけ、おのづから知り好む所となりぬれば、艶なることどもを盡さむ中に、なにのあうなきいひすぐしをかはし侍らむ。斯ういと埋木を折り入れたる心ばせにてかの院に交らひ侍らば、そこに知らぬ男にいであひものいふとも、人の、あうなき名をいひおほすべきならずなど、心ゆるがして、おのづからなまめきならひ侍りなむをや。

ましてわかき人のかたちにつけて、年のよはひにつつましき事なきが、おのが心に入れてけさうだち、物をもいはむと好みたちたらむは、こよなう人に劣るも侍るまじ。されど内わたりにて、明け暮れ見ならし、きじろひ給ふ女御、きさいおはせず、その御方、かの細殿といひ並ぶる御あたりもなく、をのことも、女もいどましき事もなきにうちとけ、宮のやうとして、色めかしきをば、いとあはあはしと思しめいたれば、少しよろしからむと思ふ人はおぼろげにて出で

の侍らず。心やすく物恥ぢせず。とあらむかからむの名をも惜まぬ人、はた、ことなる心ばせのぶるもなくやは。

唯さやうの人のやすきままに立ちよりてうち語らへば、中宮の人うもれたり。もしは用意なし。」などいひ侍るなるべし。上臈中臈の程ぞ餘り引き入りさうずめきてのみ侍るめる。さのみして宮の御ため物のかざりにはあらず。見苦しとも見はべり。これらをかくなりて侍るやうなれど、人はみなとりくにて、こよなう劣り優る事も侍らず。そのこと敏ければ、かのことおくれなどぞ侍るめるかし。されど、若人だにおもりかならむと、まめだち侍るめる世に、見苦しうされ侍らむもいとかたはならむ。たゞ大かたをいとかくなさけなからずもがなと見侍り。

されば、宮の御心あかぬ所なく、らうくしく心にくくおはしますものを、あまり物づつみせさせたまへる御心に、なにともしひ出でじ。いひ出でたらむも、うしろやすく恥なき人は、世にかたはものとおぼしならひたり。げに物の

をりなど、中々なることしいでたる、後れたるには劣りたるわざなりかし。殊に深き用意なき人の、所につけて我れはがほなるが、なまひがひがしきことも、物のをりにいひ出だしたりけるを、まだいとをさなき程におはしまして、よになう、かたはなりと聞しめしおぼしみにければ、唯ことなる咎なくて過ぐすを、ただめやすきことにおぼしたる御けしきに、うちこめいたる人のむすめどもは、皆いとよらかなひ聞えさせたる程に、かくならひにけるとぞ心えて侍る。今はやうくおとなびさせ給ふまゝに、世のあべきさま、人の心のよきもあしきも、過きたるもおくれたるもみな御覽じ知りて、この宮わたりの事を、殿上人もなにもめなれて、殊にをかしきことなしと思ひいふべかめりと、皆知ろしめいたり。さりとして、心にくくもありはず、とりはづせば、いとあはつけないこともいでくるものから、なさけなくひきいれたる、かうしてもあらなむとおぼしのたまはすれど、そのならひなほりがたく、又今やうの公達といふものたふるるかたにて、あるかぎり皆まめ人なり。齋院などやうの所にて、月をも



見、花をもめづる、ひたぶるの艶なる事は、おのづから求め思ひてもいふらむ。朝夕たちまじり、ゆかしげなきわたりに、ただごとをも聞きよせ、うちいひ、もしはをかしきことをもいひかけられて、いらへ恥なからずすべき人なんよにかたくなりたるとぞ、人々はいひ侍るめる。みづからえ見侍らぬことなれば、え知らずかし。必ず人の立ちより、はかなきいらへをせむからに、にくいことをひきいでむぞあやしき。いとよう、さてもありぬべきことなり。これを人の心ありがたしとはいふに侍るめり。などか必ずしもおもにくく、ひき入りたらむがかしこからむ。またなどて、ひたたけてさまよひさしいづべきぞ。よき程にをり／＼の有様に従ひて、用ゐむことの難きなるべし。

まづは、宮の大夫まわり給ひて、啓せさせ給ふべき事ありけるをりに、いとあえかにこめい給ふ上藤だちは対面し給ふことかたし。又あひても、何事をはかくしくのたまふべくも見えず。言葉の足るまじきにもあらず、心の及ぶまじきにも侍らねど、つつまし恥かしと思ふに、僻ごともせらるるを、あいな

し。すべて聞かれじと、ほのかなるけはひをも見えじ。外の人はず侍らざるか。かかるまじらひなりぬれば、こよなきあて人も、皆世に従ふなるを、ただ姫君ながらのもてなしにぞ皆ものし給ふ。下藤のいであふを、大納言心よからずと思ひ給ふなれば、さるべき人々里にまかんで、局なるもわりなきいとまにさはるをりをりは、対面する人なくてまかで給ふ時も侍るなり。その外の上達部、宮の御方に参りなれ、物をも啓せさせ給ふは、おの／＼心よせの人おのづからとり／＼にほのしりつつ、その人ない折は、すさまじげに思ひて、立ちいづる人々の、事にふれつつ、この宮わたりのこと「うもれたり。」などいふべかんなめるもことわりに侍る。

齋院わたりの人もこれをおとしめ思ふなるべし。さりとて、わが方の見どころあり。外の人はいも見しらし、ものをも聞きとどめじと、思ひあなづらむぞまたわりなき。すべて人をもどく方は易く、わが心もちぬむことはかたかべいわざを、さは思はで、まづわれさかしに人をなきになし、よをそしる程に、

心のきはのみこそ見えあらはるめれ。いと御覽せさせまほしう侍りしふみがきかな。人の隠しおきたりけるをぬすみて、みそかに見せて、とりかへし侍りにしかば、ねたうこそ。

一九 式部と少納言

(二) 和泉式部といふ人こそ、面白うかきかはしけれ。されど、和泉はけしからぬ方こそあれ。うちとけて文走りかきたるに、そのかたのざえある人、はかない言葉のにほひも見え侍るめり。歌はいとをかしきこと、ものおぼえ、うたのことわり、まことの歌よみざまにこそ侍らざめれ。口にまかせたることどもに、必ずをかしき一ふしの目にとまるよみそへ侍り。それだに人のよみたらむ歌、難じことわりぬたらむは、いでやさまで心は得じ。口にいと

一 越中守大江雅  
致の女にて、貞  
和泉守橘道貞  
和泉妻となる。文  
章の歌に堪能に  
て、和泉式部日  
記、和泉式部集  
あり。

二 高階業遠の  
妻。大江侍とて  
父は大江匡衡、  
母は赤染衛門な  
れば、父母の稱  
呼をとりにて、  
衛門とも呼ばれ  
たり。

三 清原元輔の  
女。一條天皇中  
宮定子に仕へ、  
才氣煥發、枕草  
子の著あり。

歌のよまるなんめりとぞ見えたるすぢに侍るかし。はづかしげの歌よみやとは覺え侍らず。

(三) 丹波守の北の方をは、宮、殿などのわたりには匡衡衛門とぞいひ侍る。殊にやんごとなき程ならねど、まことにゆゑしく、歌よみとて、よろづのことにつけて、よみちらさねど、聞えたるかぎりは、はかなき折節のことも、それこそ恥かしき口つきに侍れ。やゝもせば、腰はなれぬばかり折れかゝりたる歌をよみいで、えもいはぬよしばみごととしても、我れかしこげに思ひたる人、にくゝもいとほしくもおぼえ侍るわざなり。

(三) 清少納言こそしたり顔にいみじう侍りける人。さばかりさかしだち、まなかさちらして侍るほども、よく見れ



一孝の作者の夫宣の死後。

一つには、ふる歌、物語のえもいはず蟲のすになりたる、むづかしくはひちれば、あけて見る人も侍らず。片つ方に、書どもわざと置き重ねし人も侍らずなりにし後、手觸るる人もことになし。それらをつれづれせめてあまりぬる時、一つ二つひきいでて見侍るを、女房あつまりて、「おまへはかくおはすれば、御さいはひは少きなり。なでふ女がまんぶみは讀む。昔は經讀むをだに、人は制しき。」と、しりうごちいふを聞き侍るにも「物忌みける人の行く末、いのち長かるめるよしども見えぬためしなり。」といはまほしく侍れど、おもひくまなきやうなり。ことはたさもあり。よろづのこと。人によりてことごとなり。誇りかにきら／＼しく心ちよげに見ゆる人あり。

一二非難する女房だちに諷するなり。

一三佛道修業に専らなること。

よろづつれ／＼なる人のまざる事なきまゝに、古きほんごひきさがし、行ひがちに、口ひ／＼らかし、數珠の音高きなど、いと心づきなく見ゆるわざなりと思ひたまへて、心にまかせつべき事をさへ、わがつかふ人の目に憚り、心につゝむ。まして人の中に交りてはいはまほしきことも侍れど、いでやと思ほえ、心うまじき人にはいひてやくなかるべし。物もどきうちし、我れはと思へる人の前にては、うるさければ、ものいふことも物憂く侍る。殊にいとしも、物のかたがたえたる人はかたし。たゞわが心の立てつるすぢをとらへて、人をばなきになすなめり。<sup>(二四)</sup>それ心より外のわがおもかけを恥づと見れど、えさらずさし向ひ、交りぬたる事だにあり。しか／＼さへも

一四古今集、戀に「夢にだに見ゆ」とは見えじ朝影な朝なわが影

に恥づる身なれ  
ば「との心を取  
りしなるべし。」

どかれしかたと、恥かしきにはあらねど、むづかしと思  
ひて、ほけられたる人にいとゞなりはてて侍れば、かう  
は推し量らざりき。

「いと艶に恥かしく、人に見えにくげに、そばくしき  
様して、物語好み、よしめき、歌がちに、人を人ともお  
もはず、ねたげに、見おとさむものとなんみな人々いひ  
思ひつづくみしを、見るにはあやしきまでおいらかに、  
こと人かとなんおぼゆる。」とぞ(二五)みないひ侍るに恥かしく、  
人にかうおいそけものと見おとされにけるとは思ひ侍れ  
ど、たゞこれぞわが心とならひもてなし侍るありさま、  
宮のおまへも、「いとうちとけては見えじとなんおもひし  
かど、人よりけにむつまじうなりにたるこそ。」とのたま

一五 關根博士は  
「およすけもの」  
と同語ならむか  
といはる。一説  
として掲ぐ。

一六 家長日記に  
「口持ことごと  
しげに見とがむ  
るもおそろし  
とあり。くちつ  
き、即ち言葉つ  
きの意。」

ばするをりく侍り。くせくしく、やさしだち、恥ぢ  
られ奉る人にもそばめだてられて侍らまし。さまよう、  
すべて人はおいらかに、少し心おきてのどやかに、おち  
ぬるをもととしてこそ、ゆゑもよしもをかしくうしろ  
やすけれ。もしは、色めかしくあだあだしけれど、本性  
の人がら癖なく、かたはらのため見えにくきさせずだ  
になりぬれば、にくうは侍るまじ。

我れはと、くすしく、口(二六)もち、けしきことくしくな  
りぬる人は、立居につけて、われ用意せらるるほどに、  
その人には目とゞまる。目をしとゞめつれば、必ず物を  
いふ言葉の中にも、來てゐるふるまひ、立ちていくらし  
るでにも、かならず癖は見つけらるるわざに侍り。物い



史の上の實在人物に擬したるものからしとの疑よりなく言はれたるなりとの意に解けり。二 作者の里亭に仕へたる私の侍女。三 作者の兄式部或惟規。

しくぞ侍る。このふるさとの女の前にてだにつゝみ侍るものを、さる所にてさえさかしいで侍らむよ。この式部の丞といふ人の、わらはにて史記といふ書読み侍りし時、聞きならひつゝ、かの人は遅う読みとり、忘るる所をも、あやしきまでぞさとく侍りしかば、書に心入れたる親は、「口惜しう、をのこ子にてもたらぬこそさいはひなかりけれ。」とぞ、常に歎かれ侍りし。

それを、「をのこだにさえがりぬる人は、いかにぞや。はなやかならずのみ侍るめるよ。」と、やうく人のいふも聞きとめて後、一といふ文字をだに書きわたし侍らず、いとてづゝにあさましく侍り。読みし書などいひけむもの、目にもとゞめずなりて侍りしに、いよくかかるこ

四 白氏文集

五 白氏文集中の詩の一體なり。樂府とはもと音樂府を掌る役所の名稱なりしを、轉じて詩の一體をいふに至れり。

と聞き侍りしかば、いかに人も傳へ聞きて憎むらむとはづかしさに、御屏風のかみにかきたることをだに讀まぬがほをし侍りしを、宮のおまへにて、文集の所々よませ給ひなどして、さるさまの事知らしめさせまほしげにおぼいたりしかば、いと忍びて人のさぶらはぬもののひまゝに、おとしの夏ごろより、樂府といふ書二卷をぞ、しどけなく、かう教へたてきこえさせはべるも隠し侍り。宮もしのびさせ給ひしかど、殿もうちもけしきを知らせ給ひて、御ふみどもをめでたう書かせ給ひてぞ殿は奉らせ給ふ。まことにかう讀ませ給ひなどすること、はた彼のものいひの内侍はえ聞かざるべし。知りたらばいかに誹り侍らむものを、すべて世の中ことわざしげく

憂きものに侍りけり。

いかに今は、こといみし侍らじ。人はといふとも、かくいふとも、たゞ阿彌陀佛にたゆみなく經をならひ侍らむ。世の厭はしき事は、すべてつゆばかり心も留らずなりにて侍れば、ひじりにならむに、懈怠すべからず侍らす。唯ひたみちにそむきても、雲にのぼらぬほどのたゆたふべきやうなん侍るべかんなる。それにやすらひ侍るなり。年はたよきほどになりもてまかる。いたうこれより老いぼれて、はた、めづらにぞ經よます、心もいとどたゆさまさり侍らむものを。心深き人まねのやうにはべれど、今はたゞかかるかたの事をぞ思ひ給ふる。それ罪ふかき人はまた必ずしもかなひ侍らじ。さきの世しらるることのみ多く侍れば、よろづにつけてぞ悲しう侍る。

御文にえかきつづけ侍らぬ事を、よきもあしきも、世にあること、身の上のうれへにても、残らず聞えさせおかまほしう侍るぞかし。けしからぬ人を思ひきこえさすとも、かかるべきことや侍る。されどつれづれにおはしますら

む。またつれづれのころを御覽ぜよ。又おぼさむことのいとかうやくなしてと多からずとも、かゝせ給へ。見給へむ。夢にてもちり侍らば、いといみじからむ。まだまだも多くぞ侍る。この頃ほんごも皆やり焼き失ひ、雛などの屋作りはこの春し侍りにし後、人のふみも侍らず、紙にわざと書かじとおもひ侍るぞいとやつれたる。ことわろきかたには侍らず。ことさらに御覽じてはとう給はらむ。えよみ侍らぬ所々もおとしぞ侍らむ。それは、何かは。御覽じも漏らさせ給へかし。かく世の人ごとのうへを思ひ思ひて、果にとちめ侍れば、身を思ひすてぬ心のさも深う侍るべきかな。何せむとにか侍らむ。(以上消息文)

□

十一日の曉、御堂へわたらせ給ふ。御車には殿の上、人々は舟にのりてさし渡りけり。それには後れてようさり参る。教化行ふ所、山、寺の作法うつして大懺悔す。しらいとうなど多う繪にかいて興じあそび給ふ。上達部多くはまかでたまひて、少しぞとまり給へる。後夜の御導師教化ども、説相みな心々、二





と聞けど、おそろしさに音もせで明したるつとめて、  
よもすがら水雞よりけになくくぞまきの戸口  
にたたきわびつる

かへし

たゞならじとばかりたたく水雞ゆゑあけてはい  
かにくやしからまし

ことし正月三日まで、宮たちの御戴きもちひに日々にもうのぼらせ給ふ。御  
供にみな上臈もまゐる。左衛門の督いだき奉り給ひて、殿もちひはとりつぎて  
上に奉らせ給ふ。二間の東の戸に向ひて、上のいただかせ奉らせ給ふなり。お  
りのぼらせ給ふ儀式見ものなり。大宮はのぼらせ給はず。今年のついたち、御  
まかなひ宰相の君、例の物の色合など殊にいとをかし。藏人は、たくみ、ひや  
うご仕うまつる。髪上げたるかたちなどこそ御まかなひはいとことに見え給へ。

寛弘六年十一月第  
三皇子誕生の翌  
年。

わりなしや、くすりの女官にて、ふやの博士さかしだちさいらぎゐたり。たう  
やく配れる、例の事どもなり。

二日、宮の大饗はとまりて、臨時客、東面とりはらひて、例のごとしたり。  
上達部は、傳の大納言、右大將、中宮大夫、四條の大納言、權中納言、侍従の  
中納言、左衛門の督、有國の宰相、大藏卿、左兵衛の督、源宰相、むかひむか  
ひにゐたまへり。源中納言、左兵衛の督、左右の宰相の中將は、なげしのしも  
に、殿上人の座の上につき給へり。わか宮いだきいで奉り給ひて、例のことど  
もいはせ奉り、うつくしみきこえさせ給ふ。うへに、「いと宮いだき奉らむ」  
と殿のたまふを、いとねたきことにし給ひて、ああとさいなむを、うつくしが  
りきこえ給ひて申し給へば、右大將など興じきこえ給ふ。

## 二二 野べの小松

うへに参り給ひて、うへ、殿上(三)にいでさせ給ひて御あ

一 道長が臨時客  
の宴はてて清涼

殿に参りしな  
 二 清涼殿の殿上  
 三 管弦の遊びな  
 四 中宮の父道長  
 五 自らかくいふな  
 六 道長の自稱、  
 七 上の御てとも  
 八 又式部の父の如  
 九 なく解くも共に當  
 十 らず。

七 今第三皇子  
 (中宮には第二)  
 八 まで生れ給へる  
 九 拾遺集、壬生  
 十 忠岑一子の日す  
 十一 なる野邊に小松の  
 十二 なかりせば千代  
 十三 のためしに何を

そびありけり。殿例の酔はせ給へり。煩はしとおもひて  
 隠るへゐたるに、<sup>(四)</sup>「など、<sup>(五)</sup>御てての、御まへの御遊びにめ  
 しつるに、さぶらはで急ぎまかでにける。ひがみたり。」  
 などむづからせ給へる。「さるは歌一つ仕うまつれ。<sup>(五)</sup>親の  
 かはりに、初子の日なり。よめ／＼。」とせめさせ給ふ。  
 うちいでむに、いとかたはならむ。こよなからぬ御ゑひ  
 なめれば、いとど御色合きよげに、火影はなやかにあら  
 まほしくて、「年ごろ宮のすさまじげにて、ひとところお  
 はしますをさうざうしく見奉りしに、<sup>(七)</sup>かくむづかしきま  
 で、ひだりみぎに見奉るこそうれしけれ。」と、大殿ごも  
 りたる宮たちを、ひきあけつつ見奉り給ふ。<sup>(八)</sup>「野べに小松  
 のなかりせば。」とうち誦し給ふ。新しからむことよりも、

ひかましし

をりふしの人の有様、めでたくおぼえさせ給ふ。  
 又の日夕つかた、いつしか霞みたる空を、作りつづけ  
 たる軒のひまなさにて、ただ渡殿のうへのほどをほのか  
 に見て、中つかさのめのとよへの御くちずさみをめで  
 きこゆ。この命婦こそ物の心えてかどくしくは侍る人  
 なれ。

あからさまにまかでて、二の宮の御五十日は正月十五日、その曉まゐるに、  
 小少將の君、明けはてはしたなくなりたるにまゐり給へり。れいの同じ所に  
 ゐたり。ふたりの局を一つにあはせて、かたみに里なる程も住む。ひとたびに  
 参りては、几帳ばかりをへだてにてあり。殿ぞわたらせ給ふ。「かたみに知ら  
 ぬ人も、かたらはるるな。」と、聞きにくく、されど誰も、さるうとくしきこ  
 となければ、心やすくてなん。

日たけてまうのぼる。かの君は櫻の織物の袷、赤色の唐衣、れいのすり裳着給へり。紅梅に萌黄、柳の唐衣、裳の摺目など今めかしければ、取りも代へつべくぞわかやかなる。うへ人ども十七人ぞ宮の御方に参りたる。いと宮の御まかなひは橘の三位、とりつぐ人、はしには小大夫、式部、内には小少將、みかどきさい、御帳の中に二所ながらおはします。朝日の光りあひてまばゆきまで、恥かしげなる御前なり。上は、御直衣に小口奉り、宮は例の紅の御衣、紅梅にもそぎ、柳、山吹の御衣、上には葡萄染めのおり物の御衣、柳のうへしろの御小袷、もんも色もめづらしく今めかしき奉れり。あなたはいと顯證なれば、此の奥にやをらすべりとどまりてゐたり。中務のめのと宮抱き奉りて、御帳のはさまより南さまにゐて奉る。こまかにそばそばしくなどはあらぬかたちの、唯ゆるらかに、もの／＼しき様うちして、さる方に人をしつべく、かど／＼しきけはひぞしたる。えびぞめの織物の小袷、無紋の青色に、櫻の唐衣きたり。その日の人の装束、何れとなく盡したるを、袖口のあはひわろう重ねたる人しも、

御前の物とりいとて、そこらの上達部、殿上人に、さしいでてまぼられつることこそ、後に宰相の君など、口惜しがり給ふめりし。さるはあしくも侍らざりき。ただあはひのさめたるなり。小大夫は、紅一かさね、上に紅梅の濃き薄き、五つを重ねたり。唐衣は櫻。源式部はこきに、又紅梅の綾ぞきて侍るめりし。織物ならぬをわろしとにや。それあながちの事。けさうなるにしもこそ、とりあやまちのほの見えたらんそばめをもえらせ給ふべけれ。きぬのおとりまさりはいふべきことならず。もちひ参らせ給ふことども果てて、御臺などまかでて、廂の御簾上ぐるきはに、うへの女房は御帳の西の面の畫のおましにおしかさねたるやうにて並みたる。三位をはじめて、内侍のすけたちもあまた参れり。

宮の人々は、わかうどは長押のしも。東の廂の南のさうじはなちて、みすかけたるに上臈はゐたり。御帳のひんがしのはさまただ少しあるに、大納言の君、小少將の君み給へる所にたづねゆきて見る。うへは、ひらしきの御座におもの

まわりすゑたり。お前のものしたるさまいひつくさん方なし。簀子に北むきに西をかみにて、上達部、左、右、内のおほいどの、春宮大夫、中宮大夫、四條の大納言、それよりしもはえ見侍らざりき。御あそびあり。殿上人は、この對の辰巳にあたりたる廊に候らふ。地下は定まれり。かけまさの朝臣、これかぜの朝臣、ゆきよし、ともまさなどやうの人々、うへに、四條の大納言拍子とり、頭辨琵琶、ことは經孝朝臣、左宰相中將笙の笛とぞ。雙調の聲にて「あなたふと」次に「むしろだ」「この殿」などうたふ。曲のものは、鳥の破急をあそぶ。外の座にもてうしなどを吹く。歌に拍子うちたがへて咎めらる。「いせの海」にぞありし。右の大臣、和琴いとおもしろしなど聞きはやしたまひ、されたまふめりし。果てにはいみじきあやまちのいとほしきをこそ、見る人の身さへひえ侍りしか。御おくりもの笛二つ、箱にいれてとぞ見え侍りし。

### 紫式部日記 終

昭和三年四月一日印刷  
昭和三年四月五日發行

十六夜、更科、紫式部日記奥付

定價金壹圓五拾錢

著作  
所  
有

著者 北 島 葭 江  
發行者 大阪市南區安堂寺橋通三丁目四拾五番地 立 川 熊 次 郎  
印刷者 大阪市西區阿波座二番町三番地 北 隅 茂

### 發行所

大阪南區安堂寺橋通三丁目四拾五番地  
書籍出版業 立川書店  
電話 船場一九四番  
振替 大阪一四六一番

終